

令和6年度第2回岡山市基本政策審議会

令和7年3月17日（月）

1 開会

○司会 それでは、定刻が参りましたので、ただいまより令和6年度第2回岡山市基本政策審議会を開催いたします。

私は、本日の司会を務めさせていただきます政策企画課長の高木でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

開会に当たりまして、大森市長からご挨拶を申し上げます。

2 市長あいさつ

○大森市長 皆さんこんにちは。

今日はお忙しいところ、基本政策審議会にお越しいただきましてありがとうございます。

実は、今日午前中、市議会の最終日でありまして、令和7年度予算が成立いたしました。各会派の方々がそこで演説をされたんですけれども、その中の一人がこういう言い方をされました。今までの総合計画は、岡山の持つポテンシャルを生かせということが中心にあったと思うと。しかしながら、これだけ経済が回り、様々な動きが活発化している中で、ポテンシャルを生かせという表現ではなくなるんじゃないかというようなことがあったわけでありまして。それ自身はうれしい指摘ではあるんですが、今日人口問題などを整理させていただいていますので、ご意見をいただきたいと思います。岡山市の場合、外国人を入れて何とか社会増というのが最も近々のものがあります。外国人自身をどうこうというわけじゃないんですけれども、日本人自身は社会減になっているわけでありまして。じゃあ、岡山だけがそうなのかというと、全国の政令市、首都圏を除く政令市はどこもそういう傾向にありまして、札幌、仙台、名古屋、近畿圏、広島、福岡、みんなそうなんですね。だから、市内GDP、民間投資などがいい数字が出ても、したがって一定の利益が岡山に残り、それがいい効果を生んでいくんだろうとは思いますが、それ以上に東京の威力がどうもあるというところでありまして。これについては、岡山だけの動きでは何ともならないのかもしれませんが、少なくとも岡山としてどうするのか。そして、全国の自治体としてどう対

応していくのか、そういったところもぜひご意見をいただければなというように思っている次第であります。今日はよろしくお願い申し上げます。

3 委員出席状況

○司会 ありがとうございます。

なお、本日は岡山委員が遅れてこられる旨をご連絡いただいております。また、日下委員、田中委員、それから辻本委員の3名がご都合によりご欠席をされていますが、基本政策審議会設置条例第6条第2項に規定する委員の過半数のご出席をいただいておりますので、当審議会は成立しております。

それでは、本審議会設置条例第6条第1項により、会長が議長となることになっておりますので、これからの議事運営は阿部会長にお願いいたします。

4 議事

○阿部会長 皆さんこんにちは。会長を務めております阿部でございます。

委員の皆様方には、毎回活発な議論をいただいておりますけれども、今市長さんからもご所望がありましたように、いろいろと難しい案件もございますので、率直な議論をいただければというふうに思っております。よろしくお願いいたします。

それで、事務局のほうから傍聴希望者の有無についてご発言をお願いしたいと思いますが。

○司会 今のところ、傍聴希望者はいらっしゃいませんが、特に支障がなければ本審議会を公開とした上で、この後傍聴希望者が来られた場合の許可についてもご確認をいただければと思います。

○阿部会長 今、事務局からご発言がございましたように、本日の審議につきまして、特に支障のある事由はないと思われますので、公開として傍聴を許可したいと思いますが、委員の皆様方いかがでしょうか。よろしゅうございますか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○阿部会長 ありがとうございます。

それでは、これから審議に入らせていただきたいと思います。

まず、協議に沿って進めてまいりたいと思いますが、(1)番の時代潮流・市民意見の聴取結果等についてということで、まず事務局からご説明をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○北川政策局長 政策局長の北川でございます。よろしくお願いいたします。

お配りしております資料の3に沿って説明をいたします。

まず、3ページをご覧ください。

岡山市の将来推計人口についてです。

ここでは、令和5年に国立社会保障・人口問題研究所が公表した人口推計を基に、2050年までの推計値をお示ししております。この推計は、令和2年の国勢調査がベースとなっております。岡山市の人口は、2020年（令和2年）頃をピークに緩やかな減少傾向に転じております。10年後の2035年には70万人を切り、2050年には約64万人まで減少すると見込まれております。生産年齢人口及び年少人口が減少する中、高齢者人口は2050年まで増加していく見込みであり、少子・高齢化が進んでいくことが想定されております。

4ページをご覧ください。

岡山市の人口動態についてです。

住民基本台帳をベースに見ますと、近年人口減少が拡大しております。日本人を見ますと、人口減少の拡大の主な要因は出生数と死亡数の差である自然動態の減少が拡大していることにございますが、社会動態、こちらは転入者数と転出者数の差でございますけれども、社会動態についても2018年以降、2020年を除いて減少の傾向が続いております。外国人について見ますと、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、国外との移動が抑制された2020年、2021年では大きく落ち込みましたが、2022年には回復をしております。

次に、5ページをご覧ください。

世帯数の推移です。

世帯数は増加傾向にありますが、その背景には単身世帯、特に高齢の単身世帯の増加が要因としてございます。また、夫婦と子供から成る世帯の割合が下降傾向にある

一方で、独り親世帯の割合が上昇傾向となっております。

6 ページをご覧ください。

年齢層別の人口割合について、政令市で比較したものを示しております。

ゼロ歳から14歳、また15歳から29歳の若年層は、ともにその割合について指定都市平均を上回っており、比較的若いまちと言えます。また、15歳から29歳を男女別に見ると、岡山市は男女がほぼ同じ割合となっており、男女のバランスが取れているまちと言えます。

7 ページをご覧ください。

自然動態の推移です。

自然動態の総論については先ほどご説明したとおりですが、合計特殊出生率は全国を上回る一方で、岡山県全体より下回る状況が続いております。また、出生数を見ますと、②のグラフになりますが、2007年から2018年までは6,000人台、2019年から2022年が5,000人台でありましたが、その後2023年から4,000人台となっております。また、指定都市で合計特殊出生率を比較しますと、4番目に高い数字となっております。

8 ページをご覧ください。

平均初婚年齢の推移です。

男女とも2000年代後半まで上昇傾向にありましたが、それ以降はおおむね横ばいで推移をしております。岡山市は、全国よりも低く、岡山県よりやや高い状況となっております。

9 ページをご覧ください。

生涯未婚率の推移です。

男女ともに上昇傾向にあり、男性は全国を下回っておりますが、女性は全国と同水準となっております。

10 ページをご覧ください。

出生時の母の平均年齢の推移です。

第1子は30.3歳前後、第2子は32.5歳前後を推移する一方で、第3子は上昇傾向で推移をしております。また、いずれも岡山県全体を上回る水準で推移をしております。

11 ページをご覧ください。

社会動態について、年齢、男女別の移動の状況です。

岡山市と岡山県内との社会動態を見ますと、男性の転入のピーク年齢は28歳から29歳、転出のピーク年齢は26歳から34歳となっております。右側のグラフ、女性の転入のピーク年齢は23歳から28歳、転出のピーク年齢は29歳から34歳となっております。また、県外と岡山市との関係で見ますと、男性の転入のピーク年齢は19歳から22歳、転出のピーク年齢は25から27歳となっております。女性の転入のピーク年齢は19から21歳、転出のピーク年齢は24から27歳となっております。

次に、12ページをご覧ください。

県内・県外別の転出の状況です。

このページから14ページまでは、日本人の移動の状況を正確に把握するため、日本人のみを抽出したデータとなっております。こちらの資料につきましては、2019年から2023年の転出入の累計を数字の上段に、2014年から2018年の転出入の累計を下段にお示ししております。岡山市は、県内や中四国から多く転入する一方で、東京圏や大阪、兵庫などに多く転出している状況です。また、過去と比較をしてみますと、5年前と比較して東京、大阪への転出人口が5,600人程度であったものが9,300人と拡大傾向にあります。

次に、13ページをご覧ください。

大都市圏への人口の集中の状況をより分解してお示しいたします。

上段については、指定都市について、東京圏、大阪圏を除いた都市の状況です。このグラフが示しているものは、2019年から2024年について、各都市が県内、県外からどのくらい転入超過がでるかというものを示しております。全体の移動の傾向としまして、転入超過の都市、転出超過の都市がありますが、ほぼ全ての都市で県内が転入超過になっており、東京圏、大阪圏に対して転出超過となっております。

また、東京圏への転入超過の推移を比較したのが下段でございます。

こちらを見ていただきますと、これは2019年から2024年までの6か年を示しておりますが、全ての都市でコロナ禍後に一旦東京への転出が少なくなっているんですが、その後再び東京一極集中の動きが強まっております。

14ページをご覧ください。

これまでお話しした転出入の状況を少し違う角度で整理をしております。

15歳から29歳までの転出入の状況を5歳階級別に見ますと、男女ともに20歳から

24歳で転出入の幅が大きくなっております。どの年齢階級でも、東京圏、大阪圏との間では転出超過となっている一方で、県内や中国地方、四国地方との間では転入超過となっております。

15ページをご覧ください。

外国人の状況についてです。

新型コロナウイルス感染拡大に伴う出入国の制限等により落ち込んだ時期もございましたが、外国人の数は一貫して増加傾向にあり、2023年には約1.5万人となっております。国籍別に見ますと、中国、ベトナムが多く、特にベトナムは近年増加傾向にございます。また、在留資格別に見ると、留学、技能実習、永住者が多くなっております、技能実習の増加が顕著となっております。

16ページをご覧ください。

外国人の社会動態についてです。

左側のグラフが転入、右側のグラフが転出となっております。転出入先を見ますと、転入においては、海外から直接岡山市に転入する割合が大きくなっております。転出においては、国内の他地域への転出が大きいという状況です。

次に、2. 時代潮流に移ります。

17ページをご覧ください。

これまでご説明してまいりました少子・高齢化、人口減少の加速だけでなく、近年関心が高まっているウェルビーイングなど、物質的な豊かさだけでなく精神的な充足感や健康などを含めた豊かさに注目が集まっているという傾向がございます。また、このほかにもデジタル技術、グローバル化の進展など、近年国内外を取り巻く状況について整理をしております。

経済、社会、環境など、多方面において世界規模の大きな変化が生じておりますので、次期総合計画の策定に当たっては、こうした時世の変化やその影響を踏まえつつ、時代に即したまちづくりの方向を検討していく必要があると考えております。

次に、19ページをご覧ください。

岡山市の特性についてです。

中四国を代表する都市として、本所、本社、本店が増加しているといった高次都市機能の集積や、倉庫面積が中国地方で1位など、交通の広域拠点性といった岡山市の強みと言われている特性をまとめております。ほかにも、国指定史跡が指定都市2番

目に多いといった歴史、伝統文化や、活発な地域活動、SDGsの取組も岡山市の特性として挙げられると考えております。

続いて、20ページをご覧ください。

先ほどのページでご紹介したような岡山市の特性を、指定都市と比較したものでございます。

生活費の安さ、教育、文化、医療環境が充実し、子育てと仕事の両立がしやすい環境にあるなど、生活する場としての強みが見えてくることから、子供から高齢者まで安心して暮らすことができるまちであるといえると考えております。また、市内総生産等の経済指標の伸び率が高く、この点を生かしていきたいと考えているところで

次に、4つ目の市民意見聴取の結果、市民ニーズについてご説明いたします。

21ページをご覧ください。

こちらは、今年度実施したワークショップの結果でございます。資料の左側が昨年10月に実施した若者100人ワークショップ、大学生等が参加したものでございます。右側が11月から12月にかけて幅広い年齢層を対象に、市内で4回開催したまちづくりワークショップの結果です。このワークショップの中では、岡山市の特性、お宝と理想のまちの姿、そのために必要な取組等について意見聴取を行いました。言葉を幾つも書いてございますが、こちらはそのワークショップで出てきた言葉について、その出現した量を文字の大きさを示すテキストマイニングという手法で示しております。大きな文字で書いてあるものがたくさん出てきたというものです。どちらのワークショップにおいても、岡山を代表する観光地の岡山城や後樂園とともに、フルーツや交通の利便性に関する言葉が多く出てきました。

次に、22ページ、23ページをご覧ください。

ワークショップで聞いた理想のまちの姿について、意見を政策分野に沿って集計をしたものでございます。

意見の多かった分野としては、「賑わい・活気」や「つながり・交流」といったものとなっております。続いて「経済・仕事」、「都市・交通」、「子ども・教育」といった分野が多く出ておりまして、分野横断的な意見に続いて、個別の分野についての意見が出てきたという状況です。全体的な傾向としては、多様な人々とのリアルな交流、イベントの開催によるにぎわいの創出や世代を超えた人々のつながりがあり、

ワーク・ライフ・バランスの充実した、安心して生き生きと暮らし続けられるまちが求められておりまして、感性的な満足度を求める志向が見られます。

続いて、24ページから26ページでございます。

こちらは、小・中学生アンケートの結果です。

小・中学生アンケートにおきましては、小学5年生から中学3年生までを対象に、今後のまちづくりに関するアンケートを実施しました。大人になってからも岡山市に住み続けたいと思うかどうかという問いについては、「とても思う」と「思う」が8割前後となっております。

25ページをご覧ください。

岡山市に初めて来た人に紹介したいよいところや自慢できることを尋ねたところ、小・中学生ともに、自然災害の少なさや、自然が豊かでまちに木や花などの緑が多い、新鮮でおいしい食べ物が多いなどが上位となりました。

26ページをご覧ください。

自由記述方式で、大人になったとき岡山市がどんなまちになってほしいかについての質問をしております。その質問の答えについて、共起ネットワークと呼ばれる単語のつながりを可視化する手法で整理をしたのが、こちらの図になります。「まち」という言葉を中心として、スポーツが盛ん、自然が豊か、安全というキーワードが多く出てきております。これらから、仕事を選べて、夢がかなうといった小・中学生ならではのイメージが提案されたものと考えております。

最後に、27ページをご覧ください。

市民意識調査の分析です。

令和5年度の市民意識調査における施策のうち、重要度が高く、満足度が低かったものは、高齢者福祉の充実や子育て支援、児童福祉の充実、公共交通の充実となっております。それらの過去3回分の満足度の経年変化を見ますと、いずれの施策も上昇傾向にございます。

私からの説明は以上でございます。

○阿部会長 ありがとうございました。

事務局から時代潮流等について説明がございました。この内容を踏まえ、委員の皆様方から岡山市の中・長期的な視点、まちづくりの指針となる次期総合計画の策定に

向けて、それぞれの専門分野にとらわれずに、それを踏まえた形で幅広くご意見をいただきたいというふうに思います。

会議全体を1時間半程度で終えることを目標にしておりますので、まずは委員の皆様方から密度の濃い発言をいただきまして、それぞれ個々の事由について、回答を要することについては後日事務局のほうから回答をお願いするというふうな形で進めていければと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、進め方につきましては、私のほうからまずは指名をさせていただき、それぞれ発言をお願いしたいというふうに思います。

まずは、これからのまちづくりを考える上で最も大きな要素の一つである人口減少問題、特に若年層の人口動態に関して、日頃学生にも接しておられ、社会学の専門家としての知見等が豊富な濱西さんからお伺いしたいと思います。失礼ですが、失礼ですけれども、よろしくお願いいたします。まずは口火を切っていただきたいと思います。

○濱西委員 よろしくお願ひします。座ったままで失礼いたします。

私は、14年前に大阪から岡山に参りまして以来、女子大でずっと勤めております。5人兄弟でみんな男で、それで女子大に来て、学生にいろいろなことを聞く中で驚きの連続、つまり男性である場合、ほとんどそういう経験をしていないこと、いろいろ信じられないような経験をしているということが分かってまいりました。それが2018年に岡山県の条例で駅前のスカウトを禁止すると。そういった前に学生のいろいろな被害があったというもので、それで関わりまして、そこからいろいろセンター長をするようになって、それまでは現代社会学科の学生だけでしたけれども、今は全学の、ですから2,000名ぐらいの学生といろいろ話す機会も今はできています。

この山陽新聞の記事は少し以前に書かせていただいた、これは山陽新聞へのコメントの記事なので、そういう書き方にはなっているんですけども、あともう一つ資料を作っていたいて、これは市のほうから提供いただきまして、既に今日、先ほど確認しました資料の中でも、若年の人たちが県からはどんどん移動していますし、市からも移動しつつあるということは分かってきているんですが、もう少しそれが正確に10代といっても20代とも大分違いますので、いろいろ細かく確認しておきたいということで市をお願いをして、私のほうで作成したものでございます。

1つは、私から、市は市長を中心にとっても大事なことをいろいろなさっておられまして、市役所の職員さんの働き方とかにもプラスになっていますし、私は市の男女共同参画専門員会の委員長や委員を4年ぐらいしておりましたので、いろいろ市のご努力というのはよく分かっておりますし、例えば委員会、審議会の女性比だったり男女比だったり、いろいろ義務化をされていたりしてすばらしいと思いましたし、いろいろ活動をされていること、学生イノベーションチャレンジとかも、うちの学生もたくさん参加しておりますけれども、先駆的なことをなさっておられるなと思っております。それで、路面電車だったり、あるいは芸術祭の取組も、どんどん学生にとってはそういったものに市が最先端だなと思えば思うほど愛着は出てくるもので、そういったものもすばらしく、路面電車も僕は賛成で、もっとエコロジーに強いまちにしていけばいくほど、これは若い人にとっては誇りといいますか、各地からそういう市を見学に来られたりすることもあるので、岡山といえどという形でそういうものをいろいろつくっていただくのは、ひいては若い人たちが岡山にしようという気持ちにつながっていくので、すばらしいことだなと思っています。

その上で、市長がおっしゃられたように、これはどうしても全国的にどんどん人口は減っていきますので、その中で市として何かこういう先駆的なことをなさるといいのというふうに思って、ずっと思ってきたことが幾つかありますので、その辺を少しお話しさせていただきますと、今日私が持ってきましたこの、ちょっと細かいですが、資料をご覧くださいますと、全般的な傾向は市のほうで作られた資料そのもので、私は若年の女性の方がどういうふうに動いておられるのか、特にそれを知りたくて、1歳刻みでデータをつくっていただきました。15から19というところちょっとアバウトですし、20から24というのはアバウトですので、1歳刻みでつくっていただきました。もちろんこれは住民票の異動ですので、住民票を動かしていない場合にはこれに反映されてこないもので、もちろん限界はあるんですけども、特に若年の、右側のほうを見ていただきますと、22歳ぐらいまでは確実に女性は市に入ってきておられるという感じですね。それが如実に変わるのが23歳で、ここで大きく入れ替わる。これは昔から、10年前からそういう感じがあって、特にこの5年はそれが、恐らくコロナ禍の後、学生に接してしましても、コロナ禍の中でオンラインでの面接が可能になりましたので、多くの学生が地域の企業と関東の、あるいは関西の企業とを平等に比較できるようになって、従来はお金を稼がないとバスで東京まで行けなかったもので、

就職活動も大変だったんですが、そこが今は最後まで面接のままで終わるという会社もあるぐらい、オンラインのままで終わる会社もあるぐらいですので、4月に初めて対面で会うみたいな、そういう会社も今コロナ禍後にもたくさんありますので、学生からすると障壁が全然ないので、恐らくどんどん今加速していているというところは、そういうコロナ禍後の就職活動の変化にもよるのかなと思っています。

それで、左が男性なんですけれども、若年者が県外に移動しているという中で、また男女で大分違うのかなという気がしています。男性の場合は、既に大学を選ぶ段階、これは半分ぐらいが大卒だとしますと、大学を選ぶ段階で既に県外にも、あるいは市外にも出ていっている。あるいは、23歳以降でも意外にそこまで一方的な動きではないんですけれども、女性ですと、18から22までと23歳以降で極端に傾向が違う。恐らくこれは、私も学生にいろいろなことを聞く中で、親の希望でなるべく県内にいてほしいというようなリクエストがあって、特に大学を選ぶ段階ではお金を払うのは保護者ですので、さすがにその保護者の意向をそこまで無視できないので、ある程度県内、市内にとどまるんですけれども、ただ心の中では出ていきたいと思っているので、就職活動のタイミングで、これは親が幾ら言っても、結局どこに内定を得たかによって決まってしまうので、あるいはそういう理由が成り立ちますので、子供たちは堂々と出ていくというところが、私が学生に聞いていても、どうもそういう傾向があって、それをこのデータは一応表しているのかなという。もちろん、半分は高卒でそのまま就職されておられますので、本当はデータでちゃんと見ないといけないんですが、全般的にはそういうことは言えるのかなと。つまり、こういうデータで、先ほども市でのいろいろな調査、グループワーク的なもので聞かれたりというのがあるんですけれども、この男女で、これは国籍上の男女でいいんですけれども、男女でデータを出していかないと、対策を間違えてしまうのかなという気がしております。つまり、男性の場合は大学を卒業した段階で大きく変わりはない、ありますけれども、女性ほどではないので。だから、男性をとどませたい場合の政策と女性を市にとどませたい政策は、恐らくちょっと違うものをしないと、うまく効果が上がらないのかなと思っています。男女はやや利害がぶつかるところがありますので、同じ、例えば平均を取ってしまうと、どちらにもあまり有効じゃない政策になってしまうということがあるのかなと思います。そういう傾向は、実は女性だけを見ても、つまり22歳まではどんどん市に入ってきているんだけれども、23歳以降はどんどん出ていっ

ているわけですね。ただ、これは合計をすると、増えているように見えるわけですね。あるいは、最近減ってきていますけれども、別に市にそんなに出ていっていないんじゃないかというふうに錯覚をしてしまうんですけれども、これは一番右下のグラフは5歳ぐらいで一応分けているグラフなんですけれども、22歳までは、最近ちょっと減ってきてはいますけれども、やはりずっと入ってきていると。それで、23歳以降は出ていっていると。この辺が合計、足してしまったり、変な年齢でこれを捉えてしまうと誤解してしまうので、20代、特に22歳、23歳ぐらいのところはかなりピンポイントに、特に女性の場合はピンポイントに政策を打たれるとすごくいいのかなと思っています。

最近、つい最近ですけれども、奨学金の返還支援策がある市町村というものが、例えば岩手、山形だったり富山だったり秋田だったり、あるんですけれども、例えばそういうふうに学生の人たちに、奨学金がやはりみんな重くのしかかります。国公立は特にそうですし、私立でも奨学金はローンとして残りますので、その辺をもし市町村が支援してくれるのであれば、例えば有効じゃないかなとか、そういったことをやり始めているところはありますので、ぜひ22歳の、特に女性の22歳あたりにピンポイントに効くような政策を打たれたりするといいのかなと思っています。

あと、じゃあ、そもそもなぜ若い女性、私が話しているような学生さんたちが、隙あらば都会に出ていこうとするのかですね。隙あらば、本当は大学のときに出ていきたいけれども、それは親がなかなか許さないの、就職で出ていくかという、これは新聞記事のほうにも書いてありますが、これは全国的にも内閣府もいろいろ把握していますが、岡山市はまだいいと思いますけれども、まずは地方に行けば行くほどいろいろな慣習が残っておりますので、これは我々、私のような男にはなかなか感じられない、あまり経験しないんだけど、女性の方はいろいろ経験されている、いろいろな地域での祭りだったり町内会だったり、いろいろなものがあるわけですね。それが極端にまだ日本は残っていますので。大都会は、これは社会学の研究でもかなり寛容です。大抵はいろいろな慣習が総体化されていますし、隣の人は知らない人ばかりなので、そんなに厳しく地域のルールをつくっても仕方がないので、大都会はまず寛容です。かつ、大都会には大企業があります。それで、大企業は物凄く株主からチェックを受けていますので、それは相当ジェンダーバランスもかなり努力しておりますね。例えばセクハラだったりということも、相当厳しくなっています。そのあたり

が地方の、私が学生から聞く限りではまだまだ残っている。それこそすぐにSNSでも大きく話題になったりもする。ですから、そういったものは若い人の耳に入るし、それは間違い、根拠がないわけではなくて、私が学生から聞く限りでも、入社した段階でいろいろなセクハラを受けるとかということを聞いておりますので、この辺は根拠がないわけではないんですね。そういった情報は、学生には伝わっています。特に女子学生に伝わっていますので、元から、隙あれば大企業に行くほうが安全に働けるんじゃないかと。大都会の大企業に行くほうが安全に、さらに言うとグローバル企業のほうが安全じゃないかと、そういう思いは持っております。うちの学生は珍しくて、7割がUターンで就職をします非常に珍しい大学ですけども、それでも年々東京に行く人の割合が増えています。岡山にいたくないという人もいたりします。それは、本当は大学のときに出たかったんだけどということですね。

ですから、この話は非常に根深くて、かつ深刻で、その辺が治らない限りは、日本全国から大都会への、特に女性の移動というのがまず止まることはないと思います。これは、働き場がないとかという話ではないです。経済が活性化しないからというわけでもない。ただただ、もうちょっと人権の話ですね。経済が発展しているとか、給料がいいからとか給料が安いとかとかという話じゃあ、全然ないと思います。そうではなく、普通に働いて普通に給料をもらえればいいんですけども、働いているときにセクハラを受けるとか、それこそ就活のときにもセクハラを受けるとか、そういったことが我々男性は気づきませんが、ピンポイントで若年女性に起きているということですね。この辺は、私が男女共同参画のところで見ても、実は話題になかなかしづらい。というのも、縦割りなので、働き方のワーク・ライフ・バランスとか、そういう話はできるんですけども、人口移動であるとか、あるいはどういう政策を市としてやってほしいのかということについては、縦割りなので、調査項目にも入れられないんですね。ですから、私としてはぜひ本当に市が先駆的に、ぜひ岡山市が先駆的に動いてほしいと思っております。そのためには、先ほど言いましたように、男女別のデータであったり、あとはさすがに縦割りというのを何とかなくしていただきたいくて、今回は調査を、こういうデータをつくっていただく中、あと女性が輝くまちづくりにもお聞きして、いろいろ、どういう政策を今の若年女性が求めているのかのアンケートを何とかいろいろな形で見つけようとしたんですが、なかなかないんですね。これは、政策のことを聞くということと男女共同参画のと別の話になっているの

で、そういった質問項目が一つでもあればよかったんですけども、そういったものがないんですね。

すみません、話が過ぎましたけれども、1つは今後5年、10年かかるかもしれませんが、そういった縦割りというものを何とかなくしていただければというのと、あとはデータをぜひ男女別で、SDGsでもその辺は国連も重視していますので、ジェンダー別のいろいろなデータを蓄積いただくと、そこから自然に恐らく解決策が出てくると思います。そういったものがまだなかなか、これは岡山市だけではなくて、全国そうなんです、国もそうなんです、なかなかないので、うまい解決策が、つまり本当の原因が見えてこないで、ぜひ20代、18から23、4、5ぐらいまでの女性のピンポイントに絞ったような調査をなさると、なぜ若年女性が岡山市から出ていこうとするのかという本当の原因が分かるんじゃないかなというふうに思います。その辺はぜひ、お金がかかるということなんですけど、ぜひしていただければと思っています。

以上、基本的に市として私は評価をしております、その上でぜひ先駆的に解決策を見つけていただきたい、原因を調べるための調査が必要ですし、それをやるためには縦割りではなかなか難しく、あとデータもそもそもの属性をいろいろ聞いたりとか、いろいろなことが必要になってきますので、調査の変化というものがあればいいのかなということと、5年、10年かけて、その辺を長期的に調査をしっかりすることがすごく一番大事かなと思っています。

○阿部会長 ありがとうございます。

それでは、少し進みますけれども、福島委員さん、前回欠席されたということもありますので、ぜひ、今女性の立場というところのご発言がございましたので、発言をお願いしたいと思います。

○福島委員 私も大学のほうに勤務させていただいておりますけれども、勤務地が新倉敷というか、玉島のほうですので、若干岡山市とはまた学生環境も違うのかなと。現在、子ども教育学部というところで、55%が県内の学生で、45%が県外の学生です。ただ、県外であっても通いやすいようにということで、香川県の高松、広島の高松、そういったところからは通っている学生も、県外であってもおりますけれど

も、比較的緑豊かな、静かな環境のところですので、そもそも東京とか大阪とかに憧れて入ってくるというよりも、地元志向がやや強い学生が集まっているのかなというのは感じるがありまして、就職のときも、県外から来た学生で岡山県を受けるといような学生もおりますけれども、地元に戻って採用試験を受けるとか、地元の市町村の保育士、公立の幼稚園を受けるとかというような形で、以前ですと複数県の採用試験を受けていた学生も多かったんですけれども、最近は多くても2つぐらいで、私はここに、仕事がしたいといったら、そこのところで試験を受けて、駄目だったら講師をするとか会計年度で勤めるとか、割と自分のこの先働きたい場所というようなものも、どこでも受ければいいというような、そういう感じでは傾向としてなくなってきました。逆に、東京とか大阪、横浜、こういったところに教員採用試験であるとか、保育士のそういう仕事をあっせんしてくださるような協会みたいなところを受けて、希望する学生もいますけれども、ここについても本当に1割に満たないというような状況で、それぞれの地元の県か岡山県、岡山市、こういったところを希望する学生が多いというような状況がございます。ただ、一般企業に関しましては、なかなか自分の求めるところがなければ、県外に目を向ける学生もいるということですが、子ども教育学部というところは比較的小児と関わる仕事をしたいという学生が集まっておりますので、一般企業は1割程度ですので、県外というか、あまり東京、大阪方面に目が向いていない、むしろ住みやすいとか、そういったところで、遊ぶときには若干お金をためて外で思いっきり遊んでくるというような、そんな感覚で大学生活を送っているような学生が結構いるような感じがします。

以上でございます。

○阿部会長 ありがとうございます。女性の立場からいくと、多様性を排除したいいろいろな進歩の進め方とか、そういうのも必要だなというのをなかなか感じた次第でございます。

それでは、次は高谷さん、お願いしてよろしいですか。

○高谷委員 岡山商工会議所の高谷でございます。

実は、今会議所の中でも、先ほど福島先生からもお話があったように、女性というものをクローズアップをしております、この間ある高校の卒業式があったときも、

松田会頭、それからファジアーノの木村さん、それからその理事長が3人同じことを、女性はぜひ岡山に戻ってきてくださいというコメントを卒業生に、実はされてきました。それで、私たち会議所も、各大学の皆さん、実は岡山には大企業ばかりではないんですが、個性的なすばらしい企業がたくさんあると思います。ただ、接点がないので、高校生の皆さんが大学に、関西圏、東京圏に行って、じゃあ、大学に行くとなかなか戻ってきづらいという部分があって、経済界としても高校生の時代から学生とどう関わるかということが今クローズアップされておりますし、もっと言えば、これだけ学都岡山の中で学生さんと企業が、ネットで見たら、給料とか休みとかもいろいろ書いてはありますが、それ以上にやりがいのある企業というのはかなりあると思います。先ほどご指摘があったように、大企業だからパワハラがないとかセクハラがないということではなくて、この前も某テレビ局でもいろいろな問題があったと思いますが、本当にいい企業というのは、何がいい企業かというのは、観点がこれからどんどん学生の価値観も変わってくるというふうに思っておりますので、このあたりの政策、会議所もそうありますが、岡山市と連携しながら、早いうちに学生さんとかいう企業があるんだよという、何かそういう接点の場を持っていくということも、これは実は重要なことだというふうに1つ思っております。

もう一つは、昨日たまたま大森市長も出られておりましたが、中四国新幹線の問題が出ておりました。テレビで報道されておりましたが、実はある企業から私のところに初めて、広島支店を営業所に格下げして、岡山に支店を持ってくるという企業から初めてご通知がありました。それはなぜかという、中四国で見ている、中四国支社とか支店にするという一つのポイントで、今後岡山行政としても、以前議論があった四国州にするか中四国州にするかは別として、中四国で考えたときに、岡山のポテンシャル、逆にこの岡山で支店があれば、高知にも山陰にも広島にも、ほとんど中四国を網羅できるという観点から、営業所とか、営業所ではいけんですが、支店を岡山へ誘致というのも、これもまた学生さんにとっても優良企業が岡山に拠点を持つということで、働く場というものを、岡山に住めば稼げるということも、これは大きな重要なポイントではないかなというふうに思います。東京で働いたからって、今都内のマンションは億ションであります。中古でも1億5,000万円ぐらいするそうあります。所帯を持って、幾ら大企業で給料をもらっても、多分家を持てることはない。その代わり岡山に来ると、東京ほどの給料ではないかもしれませんが、コンパクトで

家が持てるよという夢も多分岡山でこそかなえられることじゃないかなというふうに思いますので、そういうところも、別に東京に行くなということではないんですが、ニュアンスとしては、学生さんにもご理解いただくことがごく重要なことであるかなと思います。経済界としては、岡山の企業のレベルを高めるということも含めて、今後中国四国州という一つの考え方の中で、どんどん岡山支店が増えることをひとつ推進していければと、そのあたりも岡山市行政の皆さんと連携できればというふうに思っております。

以上です。

○阿部会長 ありがとうございます。

それでは、続きまして山本委員さん、お願いできますか。

○山本委員 山本です。よろしくお願いします。

今日、まず一番なるほどなと思ったのは、濱西さんが別に配っていただいた山陽新聞の記事が、2021年に書かれているものなんですけれども、この矛盾というところが非常に興味深く、なるほどなというふうに思っておりました。特に下から2段目にある結婚とか妊娠支援とかといった対策がかえって女性にとっては負担になっているんだなというところは、じゃあ、やらないわけにはいけないので、発信の仕方とかやり方というものをもう少し考える必要があるのかなというふうに思いました。

私どもがやっている取組を参考にとということで発表させていただきますが、我々も、ちゅうぎんフィナンシャルグループということで、いかに若い人たちが今、どうもネットとか楽天とか、ネット銀行のほうを、どういうふうに入り口から抱え込んでいくかということをいろいろと業者を使って分析をしています。1つ、若者の意思決定が何に左右されているのかというのを調べたときに、てっきり感覚としてはSNSとか、そういった周りの情報からだと思いきや、親の意見を聞きますというのが実は一番多くて、20代のところも大事なんです、その親世代へのプロモーションも実は大事なのかなというのが1つ最近分かってきたところです。

それから、岡山をどうする、岡山、中銀のことが好きな人、いわゆる中銀のファンの人とそうじゃない人、それぞれにファンの人にはどうやったらもっと好きになりますかというのを聞いて、さらに好きになってもらう施策を打つ。好きでも嫌いでもな

い人にとっては、それはまだ同じ質問ではなく別の質問をしてやっていくと、ファンである人、ファンでない人それぞれ求めていくことが違ってきているということなので、こちらでは単純に岡山がどうすればいいですかという前に、そもそも岡山が好きなのか、普通、中立なのかなのところで分けてやると、もう少し違った具体的な施策が見えてくるのかなというふうには思いました。

あと、女性活躍のところなんですが、一口に女性活躍といっても、いろいろな女性のニーズがあって、私ども銀行でもキャリアアップをどんどん目指したい人もいれば、いや、家庭の事情があってキャリアアップは目指さないけれども、会社のためにも役立ちたいんですよという人も、いろいろな方がいらっしゃるので、それぞれの階層に応じて、先ほどのアンケートも年代に応じてというのがあったと思うんですけども、いろいろな様々なターゲットに絞り込んでアンケートとかをやっていくと、もう少し施策が見えてくるのかなというような気がします。

以上です。

○阿部会長 ありがとうございます。

それでは、齋藤委員さん、お願いできますでしょうか。

○齋藤委員 私の守備範囲は医療のところだと思うのですが、今日のお話を伺って、二十二、三歳の女性には、医療というのは全然訴求力がないのだなというのはよく分かりました。恐らく、もっと高い年齢の人に伺えば、その辺の、病気になっても安心とか医療機関がいっぱいあるとか、そういう岡山のアドバンテージが出てくるようなのが見つけられると思うのです。今日はアンケートの対象が、小・中学生と若い人ということなので、こういう結果になるのはある意味当然かなと思っています。

ただ、資料にもありましたが、医療機関が充実している、医師が多いとか病院が多いとかということと、先ほどありました子育てとかに施策を打つことが、逆にジレンマになるとかあるかもしれません。一方で例えば不妊治療の拠点も岡山市にありますので、そういう岡山ならではの医療ニーズで流入した人が、社会的に見れば微々たる数字かもしれませんが、岡山市は暮らしやすいまちだなと感じてくださって、定着してくださるというのも、あるかもしれません。こういうことも、医療分野と人口増ということで少し関連があるのかなと思って聞いておりました。

以上です。

○阿部会長 ありがとうございます。

それでは、谷一さん、お願いできますか。

○谷一委員 今日頂いた資料は、どちらもよくできているように思います。どのぐらい経費がかかったのか分かりませんが、随分ちゃんとした分析で、ちゃんとした成果が、現状がどうだということを明確に分かるような資料になっておりまして、評価できると思います。この読み方を間違えないで、ちゃんと政策に実現させていけるかどうかというのがこれからの課題ではないかなというふうに思います。若年というか、大学生までは、確かに女子が、おっしゃったように、岡山に結構いるんですね。それは今議論で出たように、親の意向というのが物凄く強くて、とにかく大学を出るまでは自分も責任があるから、特に女子学生の場合は男親がそうかもしれませんけれど、岡山から出たくない、自分の手元に置いておきたい、そういう。それで、かえって大学で外へ出たのがまた帰ってきたり、とにかくがむしゃらに岡山で縛っていたのが、今度は就職で出てしまうとか、あるいは結婚で出てしまうとか、そういうこともあるのかもしれませんが、岡山はそういう傾向が大分強いように、男の子とは大分そういった意味では違うので、ジェンダー平等と言いますけど、制服もなくせとか、いろいろな話がありますが、まだ現状では、特に地方は制服への憧れが残っているように、男女の親の意識が随分違うので、というのがあるように思います。

親、パパやおばあちゃんの意向でかなり左右される、就職先が左右される。決して、高谷さんがおっしゃったように、給料の多寡とか条件とかというのももちろん考えるのかもしれませんが、男の子は違うかもしれませんけど、特に女子の場合はそういうところに左右されるので、これは政策的にもいろいろなところでそういったイメージ化というとおかしいですけども、ぜひ岡山に残ってくださいという人たちがたくさん出ると、その子のようにいいのではないかなというようなことを思いました。

以上でございます。

○阿部会長 ありがとうございます。

それでは、次は嶋田委員さん、お願いできますか。

○嶋田委員 建築士会の嶋田です。

私も先生方のお話を聞いていたら、昔のことを思い出しまして。建築系に行きたかったんですけども、その当時岡山にはなくて、どうしてもどこか外に行かなきゃいけないというか、行きたいなど。うちの両親も、幸いなことに何も口やかましく言わなかったもので、これこれこうでここを受けたい、じゃあ、受けなさい。それで、行ったんですね。大阪のほうに行って、4年間大学生活を過ごしたんですけども、それから私はとにかく岡山に帰ってきたかったので、本当なら岡山に大学、そういう学べるところがあれば、岡山でずっと過ごしたかもしれないんですけども、もともと岡山で過ごしたかったから帰ってきたんですけども、そういう選択肢、自分がこういうところに行きたいんだ、住みたいんだ、こういうことを勉強したいんだという明確な目的がある人が選択できる場所があり、その情報がちゃんと学生さんたちに伝わっているということはすごく大事で、幸いにも私の当時よりもすごく選択肢が広がっていると思いますので、学びの場所も。だけど、こういう特徴があるよとか、こういう先輩方がいるよ、先生はこういう研究をしているよという情報をどの程度高校生たちがそういう情報を収集できているかというのが分からないんですけども、そういうことがちゃんと、うまいこと情報が伝わるようになっていることが大事だなというのと、さっき高谷委員もおっしゃいましたけど、次のステップの就職の場になると、今から思うと就職活動をしているときとかというのは全然知らなくて、あまり自分でどこまで調べたかもあまり定かではないんですけども、大人になってみると、この年になっていろいろな方々とお話をしたり、いろいろな情報を見聞きしていると、本当にいい企業がいっぱいあるんですけども、それが就職活動をしている若者には見えづらい、分かりにくいというか、知らないんだろうなと思うんです。だから、身近に就職活動をしている子がいると、こういう企業面白いよとか、この会社はこういうことに力を入れているみたいよという、少ない私の情報を渡すんですけども、そういういいところをちゃんと伝える仕組みが大事だなとは思いました。

あとは、調査の仕方がと山本委員さんがおっしゃったんですけども、なるほどなとすごい思ったんですけども。それで、またこれを見ると、委員が言われたのとはまた違うんですけども、3ページですよ。将来人口が、これはよく見えますよね。少子・高齢化で高齢者の割合がこんなに増えますという。けども、1960年ってちょう

ど私が生まれた頃に近いんですけれども、その頃って人生もっと短かったんですよ。その頃の高齢者の、この分類は多分65で切って分けてあるんでしょうから、なんだけれども、その当時の65っておじいちゃん、おばあちゃんじゃんっていうような気がするんですよ。お仕事もリタイアされている。もしかしたら、55が定年の頃だったかしらと思うんですけれども、この1960年という何年か前か、60年ぐらい前、60年以上前ですよ。それと、何か見え方が画一的だと、すごい悲壮感が漂うグラフなんですけれども、でも今の70代、65歳以上、高齢者って一くくりにされますけれども、元気な方はいっぱいいらっしゃるって、お仕事をされている方もいっぱいいらっしゃるって、もしかしたら自分でこれから何か始めようと思うような方だっていっぱいいらっしゃるんで、そんなに悲壮感が漂うことでもないんじゃないかと思うんですけれども、そういうのが目に見えないんですよ。だから、もしかしたらこのグラフの作り方もちょっと工夫してみて、こんな見方をしたら、いやいや、みんなまだこんなに元気にやっているから、そんなに悲しいことは、悲壮感が漂うことはないんだよというような、何かエールをもらえるような資料もあれば、気分が楽になるかなと思いました。

以上です。

○阿部会長 ありがとうございます。高齢化のお話は、今おっしゃるとおり、今だと70歳で始まって、それから80でその後は終わりかなという、そんな感じですね。

それでは、岡山委員さん。お願いします。

○岡山委員 大分女性の流出問題というのが話題になってきて、うちの山陽新聞の論説委員会で、何かおかしいぞといってデータを分析していて、3年ほど前に、あまりにも女性の流出のほうが多くなっているんだなというデータがくっきり出てきたので、そこから大分報道しているんですけど、それは大体岡山県のデータを使っていて、岡山市の分というわけじゃないんですけど、なかなか岡山県のほうもそんなに言っていなかったんですが、だんだん、新年度の予算とかではちょこちょこ入るようになってきたのかなというふうに思います。どんどん、でも流出の状況は悪化しているということは確かだろうと思います。それで、今皆さんのお話にあったように、昔は、「木綿のハンカチーフ」という歌がありますが、女性が地元において男性を見送っ

ていたみたいなどころがありますが、今は逆「木綿のハンカチーフ」になってきて、女性の流出のほうが多くて、それでまた残った男とのアンバランスで、結婚もカップルも成立しにくいみたいな、地域によってはそういうところも大分目立ってきて、岡山の場合はまだましなんでしょうと思いますが、そういうことも問題になってきたんだろうと思います。

それで、先ほど言われていた、あまり女性を、じゃあ引き止めるみたいなことを言い過ぎても、そんな場所だから出ていくんだみたいなことを言われて、我々も報道の仕方に大分気をつけているんですが、言い方ですね。女性を引き止めるのが目的だみたいなことをあまり言わないようにしているんです。例えば、県が縁結びネットで少子化のためのマッチングみたいなシステムをつくって、あれで効果があったと言っていますけど、女性に聞くと、あれが嫌なんだという人がいるんですね。そういうふうに結びつけようとしていること自体が出る要因だとかという人もいる。だから、官製お見合いだと安心できるという面もあるけど、官製お見合いだと嫌だという人たちもいる。だから、いろいろなチャンネルを使ってやらないといけないんだろうと思います。そうすると、広島県で大手企業とか、大手企業というか地元の企業ですね。とか、銀行とか電力会社とかが集まってHATAfulというような事業を起こして、広島県も人口流出が激しいので、そういうことの対策を立てていますが、企業間交流みたいなものの中で出会いの場をつくるとか、そういうことによって官製お見合いではないものをしようとか、そういったところのアイデアというのは取り入れてみるべきではないかなというふうに思っています。広島県は敏感に反応していて、いろいろなことをされていますので、私たちも研究して、広島県の施策がどうなっているのか見てみたいなと思っております。

それから、地元に着愛を持ったりしてもらうための方法とか、いろいろずっと考えてきました。岡山市が、政策局がやったミーティングみたいなものにも参加というか、見させてもらって、結局出てきたのが、つながりを持つということが重要なんだろうなと、若い人がですね。地域とつながりを持っていくことが重要なんだろうなというのはそこで学びましたし、先週倉敷市であった高梁川ミーティングというようなものでも、そういう話を随分した中で浮かび上がってきたのは、人との関係のつながりを持つこと、それから若い人たちの居場所となる、たまり場となるようなユースセンターみたいなものがあればいいというような話がだんだん見えてきたんですが、つ

ながりづくりのために何をするかという、岡山市では大分前から大学生のチャレンジ事業とか、地元のことをやっているようなことを早くからやってきたかと思います。県が来年度からやっとうるようなことは言っていますが、まだまだこれからということだと思います。

それで、何が地元定着に結びついているかという、私の経験上から言うと、西川緑道公園でいろいろなイベントをやっているというようなこと、それに参加すること自体で地元の人ともつながるし、地元が好きになったという例は何個も聞いてきました。東京に憧れていたのをやめたみたいなのもいたりして、そういうイベントとか、居場所というか、自分が活躍できる場をつくるということも重要なんだと思います。それから、おかやまバトンという岡大が中心にやっていた被災地支援みたいな活動、これに加わったことでも、岡山、地元に着していた人とか、それからうらじゃ祭りというのも効果があるんだろうなと思います。うらじゃに参加し、地元でやっていることによって、よその県から来た学生が何人か岡山に着しているというような例もあるので、そういうところの何らかの支援というようなものを、どう政策的に展開できるのかどうか分かりませんが、もうちょっとできたらなと思います。

それから、ユースセンターみたいなものもあれば、民間で多少岡山市内にもありますが、その民間を支援するのか、公的につくるのか、公的につくるといったって難しいかもしれませんが、公民館がある意味多少そういう役割を果たしているんだろうと思います。特に岡山市内の公民館は先進的なので、公民館で中高生とかのチームをつくって、地域課題の解決とかをしているところで、先進的なところで灘崎公民館のチーム灘であったり、それからこの前文科省に表彰された高島公民館の高島地域づくり隊であったりとか、そういう公民館発のチームというのもできてきて、こういう活動を支援していくということも効果があるのではないかと思います。大学の先生で地域活動をやっている先生に聞くと、大学からでは遅いので、高校からやってほしいと言って、高校の先生に聞くと、高校からでは遅いので中学校からやってほしいと。中学校の先生は小学校からやってほしいと言うので、早くからそういう地域に参加できるような仕組みをつくったらいいんだろうと思うんですが、小・中学校でも総合的な学習の時間、それから探求の時間みたいなことになって、だんだんグレードアップしてきて、地域課題を解決する取組が進んできましたが、私は教育関係の財団の助成審査をしていると、学校から地域活動をするための助成申請が上がってくるんですね、

いっぱい。高校からも上がってきますけど、中学校からも上がってくるんですよね。要は、そのお金がなかなか、探求活動で地域に出ていこうにも、あまりお金を持っていない。そのお金をもうちょっと工面できないのかなと。ばらまきだけだったら、いかげんな活動にも使ってしまうかもしれませんが、何らか基金じゃないけど、そのお金を取れるような、いい取組には取れるような仕組みなのか何か分かりませんが、そういうこともあっていいんじゃないかと。

あと、御南中学なんかは聞きますと、ボランティアにみんなが行きたい、行きたいと言って、とにかく競争になって地域の活動を、とにかくみんな行きたいという土壌ができてきたみたいなことを何年か前から聞いておりますが、今でもそんな感じらしいんですけど、どうやったらそういう学校ができるのか、そういう学校も参考にして何か施策を展開できないかなというふうに思いました。

あと、そういうことで小さい頃から地域との関わりを持つことで、大学で外に出てもUターンにもつながるかもしれませんし、Uターンで言うと、すみません、北川局長から教えていただいた例で言うと、金沢市が出身者となつながらを持って、メールでいろいろなふるさと情報とかを送っているというような事例があると思いますね。高校を出てしまうと、東京とかへ行ってしまうと、全部離れてしまっ、高校の先生もどうなっているか分からない状態なので、そこはもうちょっと何とかつながりを持っていないのかなというふうに思います。

あと人材で言うと、今雇用の受皿となっているのはデジタル人材だということになり、その1点ぐらいが結局雇用の受皿になっていて、なかなかほかのところではなくて、特に女性の受皿となっていますけど、岡山のデジタル人材をどういうふうにやるのか。IT企業って結局東京に集中していて、それが結局東京に行く理由にもなっているみたいなことも言われるので、あと、じゃあ、岡山の企業の中でデジタル人材をどう、製造業の企業でもデジタル人材を使えるようなことができないのかどうなのか、そういう企業で抱えたほうがいいというような指摘もありました。それから、企業にとって外国人の中でも高度人材というのを、岡山大学とかにいっぱい優秀な留学生、世界からかなり優秀な人材が来ていますが、かなり就職するにはよその県に出ていってというような面もありますので、その高度人材とかに岡山に残るような情報提供なり何なりとか、その辺のこともできないかなというふうに思います。

あと、アンケートなんかを見ると、若い人は公共交通というのが充実しているとい

うのも1つ大きな要素にもなっているかと思います。岡山市もバスの再編とか、公共交通の、地域公共交通計画をつくって、これから抜本的に変えていこうとしているので、そこを評価していただけたらなと思いますが、4月1日からバスの上下分離が始まるかと思いますが、それはもしかして全国で初めてですかねというのは気にしているんですが、そういうところをもっとアピールしていただいてもいいのかなというふうに思います。全国初だと言っているバス関係で詳しい人がいるので、そうかなと思っております。

○阿部会長 ありがとうございます。

それでは、小野委員さん、お願いできますか。

○小野委員 小野でございます。

今人口の動向ということで、全国平均では令和5年度で1.20、岡山では1.32、これが全国で第20位、東京では0.99ということで、全国最下位という、47で。というようなことで、それからすると岡山の1.32がいいのかなとは思いますが、中ぐらいですか。でも、人口を増やしていくためにはどうすればいいか、根本的な問題もあるんでしょうが、今大学の先生からも、自分の生徒さんというのは若い女性ばかりですから、そういったこともあるでしょうが、現実問題を考えてみて、例えば自社で考えてみても、親の介護をしているからなかなかお嫁に行けない、行けなかった。でも、40代、50代になってきてしまったという人、それからまた出会いが少ないというものもあるんですね。だから、今岡山委員が言われたように、市のほうもそういったマッチングのをやっておられるんだと、これは民間でもやっていますよね、確かにマッチングのイベントというのを何かホテルでやったりしているようなものがあるようなので、そういったところへどんどん出ていってもらって。なかなか、私の個人的なことで言ったらそんなでもないんですけど、マッチングが少ないのかなと。それによって、少子化、それから晩婚率ということが起きてくる。確かに、親の介護なんかでも、ある意味気の毒だなと思う。50を過ぎてやっとお母さんが亡くなったから、気が楽になったというのが、いるんです、そんな社員が。かわいそうだなと思うんですけど、現実そんなこともあったりするので、介護のことも考えてやらなきゃいけないと思います。

打って変わって今の地域のイベントというのは、これは私たちが今連合町内会、それぞれの学区の町内会、学区でそういったイベント事というのはやっています、主に。ちょうどコロナの最中というのは外に出れなかったということもあって、4年、5年は消えていたんですけど、近年になってそういったイベント事というのは、お祭りですね、やっています。それを手伝ってくれる生徒さんというのは、これは我々年寄りからすれば貴重な人材であって、若い人が主になってやってくださっている。それから、公民館でもそうですけど、先般高島の公民館で、そこの地元の中学生、高校生が一緒になって公民館活動と。この間、連合町内会の懇談会でも言われていたんですけど、事前発表をしていたんですけど、素晴らしいことをやっているなと思ったんですよ、子供が。任せてくれと、自分たちにとにかく任せてくれと。こうやってくれ、こうやってくれじゃなくて、自分たちに任せてくれ、任せてくれたら、自分たちは考えてこういうふうな活動をするんだというような、それを中学生、高校生の子が本気で言っていましたから、それならと思って、私自身も実は感心したんです。私がいる南方という学区でもそうなんですけど、掃除でも今西川緑道公園の清掃活動というのを毎年5月の第3土曜日に、西川って実は農業用水なんですね。だから、農林の管轄になるんですが、第3土曜日に水を下げて、地元の町内会なんかは掃除をしていたんですけど、今それに生徒さんに加わってもらって、どぶ掃除ですよ、西川緑道公園の清掃活動というのをずっとやるんですけど、これも水へ入って結構楽しそうにしてくれるんですよ、子供たちが一生懸命ね。それで、上がってきたらジュースを用意してやっているという、その程度のことしかないんですけど、地域の人も一緒になってそういった清掃活動をして、みんなで清掃してきれいになってよかったなという。子供たちもそれで実感が湧いて、それからそういった地域の活動に参加をしてくれるということがすごく勉強になって、いつだったか、そこの教頭先生が来られて言っていましたけど、あの活動をして、そこの引き籠もりがちだった子が物凄く一生懸命して、成績がぐっとよくなって、いい学校へ行けたんだなんていう、そんな結果論の話をしてられましたけど、なるべく地域活動にそういうふうな形で参加していただくというのはいいこと、私たちにとってもいいことだし、みんな子供たちにとってもいいことだったなと思う。学校にとっても、今高校なんかは点数制度になっていて、ボランティアに参加したら、ボランティア活動というのは点が加算されるシステムになっているんですね。そんなこともあったりして、子供たちにとってもいいと。

それから、あと世代を超えた交流のあるまち、安全・安心で地域コミュニティの強化、助け合い促進なんていうことを書かれていますが、それはそうだろうと思います。それから、防犯カメラの設置というのは、この間も市長にお願いしたのは、今回予算をつけてくださって、各岡山市内の小学校、中学校は1個ずつ防犯カメラがつくという。これも実際に見ているのは、実は1個じゃ多分足りないと思うんですよ、これ。やっと1個つくんですけど、多分これが2つ、3つ、4つ、5つぐらい要るんじゃないかと思うんですけど、それは先の話として、防犯カメラをつけていただいて、地域の子供たちもそうですし、安全・安心なまちづくりの中に子供を助ける、そんなことも考えたら、これも必要なことだなと思っています。ぜひ、協力してあげてほしいと思っています。

それから、学童保育のところへも、学童保育はいいんだけど、最近みんな子供たちはパソコンを使っているんですね。そうなってくると、パソコンに飛んでくるWi-Fiの装置がついていないというようなこともあったりして、それがまた困るんだなんていう、そんな話も出ました。そのあたりのことも設置をしていただきたい、そんなことを思っております。

以上で終わります。

○阿部会長　ありがとうございます。

それでは、西田委員さん。

○西田委員　私たち連合婦人会は、出会いのひろばというんですか、それこそクリスマスツッキングをしたり、それからティーパーティーを年2回、生涯学習課、こども企画総務課と一緒に なりまして、協力していつも開催しております。そして、クリスマスツッキングのほうには18組ぐらい参加していただきまして、また男性の方は職場では出会いがないから、なかなか結婚したいと思っても、そしてまた交際をしたいと思ってもできないので、こんな場所に参加して、少しでも出会いができればいいなと言って参加して下さっているんですけど、そしていつも1組から2組、今回ティーパーティーを2月に行ったんですけど、今4組ぐらいいいカップルができたというて、こちらのほうへ知らせがありましたので、そんなふうにして少しずつでも人口がとどまって、増えていったらいいなと思って、私たちはそのような活動を婦人会とし

てしておりますので、これからもよろしくお願いします。

○阿部会長 ありがとうございます。

それでは、一通り皆さんからご発言をいただきましたので、取りあえず副会長の杉山先生から少し発言をお願いしたいと思います。

○杉山副会長 大きなマクロの視点から見ると、岡山市というのは本当に恵まれている都市で、大体ほかの都市は全て18歳の壁というのがあって、大学に行くときから人口が減るとというのが普通なんです。18歳の壁が存在することが当たり前で、それがプラスで人口が増えるというのは、岡山大学をはじめ、大学が頑張られているからだろうというふうに強く思います。なので、そこに安住してはいけないんだろうというふうに思います。18歳の壁の次には22歳の壁というのがあって、大体22歳で今度は就職で出ていくことになります。特に男性がどんと減るのは、岡山は優秀な企業がたくさんあるんですけども、それが東京とか大阪の企業とは1対1では戦えないような壁があるんだろうというふうに思います。

それから、濱西先生がご指摘されたように、特に女性、これは多分岡山だけではなくて、広島なんかはもっと過激なんだろうと思うんですけども、22歳以降がどんどん出て行って、恐らく35歳ぐらいまでの女性が出ていく現象があります。いろいろな仮説は考えられるんですけども、濱西先生がご指摘されたように、ここのところは何人かサンプルを取って、何故出ていくのか、どうすれば女性が出ていくのを防ぐことができるのかというのは、丁寧に詰めていくべきではないかと思います。恐らく、おじさんたちのジェンダー不平等にはとても耐え切れないので、チャンスがいっぱいあるから東京へ行くよという、そういうことなのかも分かりませんが、もっとほかにあるのかも知れません。ぜひ、ここら辺は調べて、何か手が打てるかどうかというのを検討してみただいたらというふうに思います。

私たちが考えないといけない次の10年の人口ということで考えると、大体2.2万人減ということで、2.2万人の減というのは政令指定都市の中でもとても恵まれているなというふうに思います。減少がすごくなだらかなのです。これは多分冒頭大森市長さんのほうからお話がありましたけれども、外国人をうまく取り込めば、ほぼ横ば

いになる可能性もあります。そういう意味では本当に岡山市は恵まれているなというふうに思います。

それで、データがありますので、次の10年を見てみると、2.2万人が今度は3.4万人減になるということで、減少が少し大きくなっていきますけれども、それでもどちらかというとなだらかな減少ということなので、何かうまく人口減の対策を絡めると、何とかそんなに下がらないで維持できるんじゃないかというふうに思います。岡山というのは恵まれたすばらしいまちなんだなというふうに思います。

マクロの人口面はそういうことなんですけど、実はもう一つとても大切な税収の面があって、そちらのほうもこれから、超長期で見ると、人口減になると当然税収も減ってくるので、そういうことをしっかり考えていかないといけないということがあります。ご承知のように、日本の人口というのは2011年ぐらいからどんと減ってきているんですけれども、500兆円ぐらいであったGDPが今600兆円になっているので、人口が減るからといって、じゃあ、貧乏になっていくかということ、そういうことは全然ありません。だから目指すべきところは、仮に人口が減っても、収入、全体的なGDPを維持して、税収も維持していくということがすごく大切なんだろうと思います。人口の10年間、20年間のトレンドを見ていらっしゃるんですけども、当然やっていらっしゃると思うんですけども、一体税収がどういうふうになるのか。それで、どういうふうに、ひょっとすると税収については横ばいの状態がずっと続くのか、それとも微増でいけるのか、そういうことも考えないといけないし、人口減は微々たるものだということはあるんですけども、とは言いながら、どこに重点的にお金を配分していくのかということで、メリハリをつけて投資をするところを選定していかないといけないだろうというふうに思っています。

それから、いろいろな議論の中で、岡山の22歳の人口減、特に男性のほうを抑えるためには、岡山にある優秀な企業を早くからしっかり知ることが大切なんだろうというふうに思います。なので、大学生とか高校生を対象のインターンシップに市として援助を出して、岡山の優良企業をよく知る、高校時代から岡山の優良企業を肌感覚で分かっているみたいな、そういうふうなことをつくり上げて、そういう政策を回すことによって、若いときから擦り込みを徹底するということがとても大切なんだろうというふうに思います。

それから、最後に、大森市長が冒頭にお話しされた、ポテンシャルを生かすだけで

は駄目だという発言がありましたが、それはそのとおりだろうと思います。これからは、安易にポテンシャルに依存するのではなくて、自らポテンシャルをつくり出すという方向が多分必要なんだろうと思いますし、そういうことをこれから考えていかなければいけないだろうというふうに思います。それで、岡山委員からお話があり、ほかの委員からお話がありましたけれども、戦略的に考えないといけないのは、岡山は中四国の玄関だということです。交通の便とか、いろいろなものを考えてみると、中四国の中心地を岡山に持ってくるということが、多分戦略的にはすごく大切なので、そういうことを長期の目標に据えながら、あまりそういうことを露骨に言うとか、隣の県とか、反発する県がたくさんあるので、上手に表現しながら、岡山市の誇りを醸成し、そして市民の統一感といいますか、コンセンサスを得るような、そういう政策を進めていけたらいいのではないかなというふうに思っております。

私のほうは以上です。

○阿部会長　ありがとうございます。

いろいろとご意見をいただきました。私も、実は岡山にやってまいりましたのは瀬戸大橋が架かる半年前でありまして、そのとき以来ずっと岡山市を中心にしてまちづくりに関わっております。非常に恵まれた地域であると思うんですけども、ポテンシャルを生かすという面では、地域の中での連携というのがいまいちだなという気がいたしまして、私は岡山市だけではなくて、周辺の市町ともいろいろ総合計画のことで絡んだりしているんですけども、なかなか、一緒にいろいろなことを考えていけば、もっと発展のポテンシャルがあるのではないかなという気がいたします。そういう意味では、今の大森市長さんの世代というのは、これまでの市長さんの世代に比べると次の発展期に差しかかっているのではないかなと、いろいろな基盤整備が動き出して、そういつているのではないかなというふうに思っております。そのときに私自身は絡むことが大分薄くなっているという、残念ではあるんですけども。それで、自分の町内とか、いろいろなことを思っても、昔は若くていろいろなことを一生懸命考えて、近所の方々と進めてきたんですけども、これからは改めて違う町内、それからコミュニティーの活動をどういうふうにしていくかというのを真剣に考えないといけないなというのを感じております。私自身も超高齢のほうに入りつつありますので、これは頑張らなければいけないなというふうに思っております。

その中で、大きな視点で重要なのは、岡山という地域で、全体の中で岡山市がどういうふうに拠点性を発揮していくのかということを考えないといけない。なかなか、それは歴史的な経緯もあって、少し多面的な問題もあるようですけれども。そのあたりをいかにうまくコーディネートしていくかというのが、岡山市のこれからの発展にとって非常に重要なことではないかなというふうに思っております。

そういったことも、これから発展性がどういうふうになっていくかというのはこれから見ていかないといけないと思うんですけれども、ぜひ積極的に協力しながら進めてまいりたいというふうに思っております。

ちょっと中途半端な発言ですけれども、以上のようなこと、常々考えておりますことは、これまでの三十数年間は何だったのかというような、それを非常によく考えております。

というようにところで、今日の会議は終わりのほうに差しかかってまいりましたがけれども、このあたりで各委員さん方からの発言を踏まえて、市長さんのほうから何かコメントがございましたら、まとめの形でお願いできればというふうに思います。

○大森市長 今日はどうもありがとうございました。様々な視点からご意見をいただきました。それを踏まえて、これから検討させていただきたいと思いますが、取りあえず、今私が感じたことをまず2点お話し申し上げたいと思います。

山本さんからの話で、好きかどうかという点が、岡山という地を好きかどうか。これは、嫌いならいけませんよね。また、戻ってもこない。私も好きでなければ、市長で戻ってこない。それで、好きかどうかという視点で、今私は自分の立場から物を見ているからかもしれないんですけど、例えば先日、谷一さんと一緒にやっている古墳のシンポジウムをやったんですよ。最初スタッフから話がありまして、ハレノワの大劇場でやるというんです。大劇場って1,500人ですから、無謀だからやめてくれと最初言ったんですけど、実際上1,500人応募があった。ある方からのメールでは、冷めていた岡山人もお国自慢したがっているじゃないという話、これが少し前にまたRSKのtenjin9で宇喜多直家、秀家、豪姫の座談会をやったんです。そしたら、定員の倍集まったと。同じメンバーで10年前にやったときは、スタッフを入れて50名だった。それからあと、岡山さんがおっしゃったように、様々なイベントも大勢の方が集まってきている。コロナの反動もあるでしょう。だけど、何となく私はいい傾向じ

やないかなというように思います。そういう面では、根本的な話として、ふるさと、また第二のふるさとを好きになってもらう、そういったことをやっていく必要があるのかなというように思っております。

それからあとは、濱西委員がおっしゃった人権の問題です。

これは、実は今政府の総理参与をしている人間と先日東京でディスカッションしましたが、同じような話がありました。企業にそういう真の男女平等というか、そういったことをやっていただく必要があるんじゃないかと。私もそう思うんですが、先ほどちらっと話の中で、東京へ行くと大企業が多いと。大企業が多いから、ジェンダーの平等が図れているという話があるんですけど、この資料の13ページから見ると、これは男女の比はありませんが、例えば岡山よりもはるかに大企業の数が多い名古屋は、東京への転入率が岡山より高いんですね。比較すると岡山よりも大企業の比率の多い広島は、女性の転出率というか、最大になっている。この点をケアしなきゃならないんだけど、本当にそれだけなのかと。このあたりの空気感というか、高谷さんが言われたように、東京はだんだんと住居を確保するだけでも大変になってきているから、どこかで転換が起こるんでしょうが、それが一体何なのかということを考えながら、地道にやっていかなきゃいけないのかなということでもあります。様々な施策などで西田さんには本当にお世話になってますけれども、ありがとうございます。

それで、最後に会長と副会長がおっしゃった、拠点性というか、岡山の発展というのは、それは地政学的に見ていって、ぴたっと合うものが伸びていくんでしょうから、そういうものを考えながらやっていかなきゃならないと思っていますし、岡山って政令市の中で案外製造業のウェイトってあるんですね。今回、昨年11月に都市計画を少し変えたら、あっという間に30件ぐらい手が挙がってくるというようなことなので、そういった物流、そして大学が多い、研究開発とか、そういったことが中心になりながらも、この特性を生かしてやっていく。最後、杉山さんがおっしゃった、財政って定量的にやるってすごい難しくて、ただどこかで破綻をすると大変なことになると。今やっているのは、少なくとも各指標、どれも政令市の平均よりはいいということを常に念頭に置いて、實際上その数値を守りながらやらせていただいているところでもあります。今日のご意見、はっと、これはやらなきゃと思うことも随分ありましたけれども、踏まえて具体の対応をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

○阿部会長 ありがとうございました。

その他、事務局のほうから何かございますでしょうか。

5 その他

○司会 事務局でございます。

次回の令和7年度第1回目の基本政策審議会の開催日程につきましては、後日またご連絡をいたします。よろしくお願いいたします。

○阿部会長 それでは、本日予定しておりました案件については全て終了いたしましたので、進行を事務局にお返しいたします。

6 閉会

○司会 それでは、これをもちまして令和6年度第2回岡山市基本政策審議会を閉会いたします。皆様ありがとうございました。